

CT テクノロジーフォーラム参加報告

札幌医科大学附属病院 平野 透

第14回CTテクノロジーフォーラムは平成28年1月16日（土）に開催され、本会場は東京の日本教育会館 一ツ橋ホールを使用されていました。本会場とは、？この研究会に参加された方はご存知かと思いますが、数年前よりCTテクノロジーフォーラムは本会場とは別に全国にサテライト会場を設置し、高画質のweb映像をサテライト会場に配信することで、本会場に足を運ばなくても臨場感ある講師陣の講演を最初から聞くことが出来るようになっているのです。現在ではサテライト会場からも講師への質問も電子媒体にはなりますが可能となっています。さらに本会場の参加費が2000円に対しサテライト会場は1000円（お弁当付き）とお得感もあり、現在ではサテライト会場の参加者が本会場の参加者の倍以上（14回のフォーラムでは本会場参加者が300名弱に対し、サテライト会場の参加者が約2000名）になっているようです。北海道はサテライト会場が函館や北見等5~6か所に設置され、季節がら移動の大変な時期での開催においても近隣の会場で多くの方が参加できるようになっています。CTテクノロジーフォーラムは明日からでも使えるCTに関連する技術や知識の習得を目的として行っており、毎年夏に開催される最先端の技術を紹介するCTサミット（たまにその違いが判らない時も）とは会の趣旨は異なっています。今回のCTテクノロジーフォーラムは、「CT technology 温故知新」をメインタイトルとし、近年進化し続けるCT関連の技術の理解を深めるためには、過去から現在までに至るまでの技術を復習することが必要であると当番世話人の済生会熊本病院 坂本 崇氏の発案によるプログラムによって進行されました。プログラムの最初のリフレッシューズでは現在逐次近似応用再構成や逐次近似再構成などの非線形的画像再構成がCT装置に実装されつつありますが、その画像の特性を理解するためにも現在標準で実装されているフィルタ補正逆投影法 (FBP) やFBPと同様な挙動を持つコンボリューション補正逆投影法 (CBP) による再構成画像

の特性を学ぶことから始まり、ランチョンでは大腸3D-CT検査の過去からの現在に至るまでの先人達の試みを紹介すると共に、今後診療放射線技師がどのように大腸3D-CTに取り組んでいく必要があるかを講演して頂いた。午後からの公募演題では自施設での検査技術、危機管理、施設内での標準化等の更なるレベルアップのために過去から行ってきた運用の変遷についての発表。更にエキスパートの講師陣による頭部、胸部、循環器、腹部、被ばく管理に対する過去からの撮影技術や線量管理の進化や理解、そしてそれらの今後の方向性等についての話があり、最後に放射線診断医による循環器（特に冠動脈）領域においてCTの進化がもたらした画像診断の進化についての講演がありました。CTに関連する技術や診断法や画像処理方法はCT装置の列数の増加とコンピューターの処理能力の向上により進化していると言っても過言でないと思われます。しかし、進化しても変わらない画像の見かたや最適化の考え方等があることも再認識しました。

特に個々患者さんに対する撮影技術等の最適化はどんな状況であっても、利益が不利益を上回ることを念頭に医療人として取り組む必要性があることを忘れてはならないと思っております。

次回、第15回CTテクノロジーフォーラムは平成28年12月17日（土）に開催されます。北米放射線学会またはホノルルマラソンの開催日でもないので、気楽にサテライト会場で有意義な時間を過ごして頂くと良いと思います。

本会場は東京のエーザイ本社（茗荷谷）で行われます。12月ですので、フォーラム後千歳空港雪による滑走路閉鎖により帰ることが出来ないリスクや旅費宿泊費などの費用負担もありますが、講師に直接質問したい、又はよりライブ感を味わいたい、懇親会なんかあったら参加したい方には本会場への参加もありかと思えます。札幌からはそんなリスク好きな方がそれなりにいますので、一人で参加されても大丈夫です。



第14回CTテクノロジーフォーラム懇親会より